



尾道発、映画『逆光』について



森田恭子

私は映画が好きです。と、胸を張って公の場で言えるほど詳しくはないのだが、映画を観るのも、趣味の合う人と映画の話をするのもとても楽しい。「え、『蒲田行進曲』好きなんですか!」とか「やっぱりウェス・アンダーソンいいですね〜」とか「クロサワは意外に『天国と地獄』。あれのドラマ版知ってます? 佐藤浩一の」とか「『9人の翻訳家〜囚われたベストセラー』のアレックス・ロウザーたまらん」とか。キリがない。もっと書きたい。「ノーランでいえば『プレステージ』も捨て難いのよ〜」とかとか。

先日は米アカデミー賞で勝手に一人で盛り上がった。毎年、豪華絢爛な演出が施される授賞式がとにかく楽しみなのであるが、今年は残念ながらコロナの影響で非常に簡素な形式で授賞式は行われた。が、ノミネートされた作品たちはさすがのクオリティーであった。中でも『ノマドランド』が素晴らしい。家も仕事もなくした女性が車上生活者となってアメリカ西部を渡り歩く物語。主演のフランシス・マクドマンドさんは『ファーゴ』からずっと好きで、今作ではさらに凄みが増した演技に釘付けになった。

そして、Netflix制作の『Mank』もよかった。『市民ケーン』の脚本にまつわる、実話を元にした作品。あたかも1940年代に撮られたかのようなノスタルジックな映像と、鋭い視線で暴露される当時の映画業界の内幕にドキドキが止まらなかった。ならば、と。元ネタの『市民ケーン』を観ねばなるまい、と。時間軸から解き放たれたかのようなオーソン・ウェルズの恐るべき才能にただただ舌を巻いた。今更ながら。

そんな映画甘噛みファンの私に、このたび映画関連のお仕事が舞い込んだ。俳優・須藤蓮さんの初監督作品『逆光』のパンフレット制作である。

須藤さんは、主演をつとめたドラ



クラウドファンディングはこちら >> <https://motion-gallery.net/projects/gyakkofilm>

マ『ワンダーウォール』(2018)で脚本家の渡辺あやさんと出会い、今回の『逆光』も脚本は渡辺あやさん、音楽は大友良英さんという、自主制作ながら豪華な布陣で堂々の完成を果たした。特筆すべきはこの映画のロケ地が広島県尾道市であるということだ。

—昨年『ワンダーウォール 劇場版』の舞台挨拶で尾道を訪れた須藤さんと渡辺さん、たいそうこの街を気に入ったようで、実は東京での撮影を予定していた作品がコロナ禍の緊急事態宣言で延期になったこともあり、尾道なら何か撮れるかも、と、「映画の街」にやってきたのだった。お互いの持続化給付金を出し合い、俳優やスタッフもほとんど友達や知り合い、エキストラは尾道在住の有志だったりもする。

設定は1970年代、真夏の尾道で、あの入り組んだ坂道のように、若者たちの純情と葛藤が交差する青春群像劇。演じるは主人公・晃役の須藤さんの他、吉岡役(晃が好意を寄せる先輩)の中崎敏さん、文江役(晃の幼なじみ)の富山えり子さん、みーこ役(文江の友達)の木崎明さん。尾道の風景に溶け込むような演技が『逆光』の世界に自然に引き込んでくれる。

尾道という街が今も昭和の香りを残しているだけに、現代の物語かと思う一瞬があったり、夏のきらめきと、そのぶん影の色も濃くなってい

くさまに心を掴まれたり。須藤監督が「恋する感情を言葉で表せられないように、この映画を言葉で説明するのは難しい」と言うように、観る人によって好き嫌いや感想が変わってくると思うが、そこがこの映画の魅力でもある。

配給のしかたも独特で、通常ならば東京や大阪など都市部で公開されたのちに徐々に地方に広がっていくところが、『逆光』は7月に、まず尾道に唯一残る映画館・シネマ尾道からスタートし、広島県内の映画館で順次公開される。その後、東京や京都での上映も徐々に決まりつつあるようだ。

各映画館との交渉、新聞取材やラジオ出演などのプロモーション、映画公開に向けてのイベントの数々、クラウドファンディング、写真集の発行、そしてパンフレットまで、須藤さんと渡辺さんは自ら果敢に挑み、とても忙しく大変そうだが、それを楽しんでいるように見える。

作品自体もさることながら、関わる人々や場所まで巻き込んでの小さな嵐が今、尾道に巻き起こっている。『市民ケーン』を作ったオーソン・ウェルズは当時25歳、『逆光』の須藤蓮、24歳。がんばれ〜。😊

PROFILE

もりた・きょうこ/ライター、エディター。音楽カルチャー誌『LuckyRaccoon(ラッキーラクーン)』を個人発行。毎週火曜21時オンエアのFM COCOLO『おとといラジオ』DJ。2013年、東京から広島県尾道市に移住。